

ドイツ人著名なる群像 ドイツ

歴史に名を連ねる人物を、ジャンルを問わず国ごとに書き出してみるとドイツが断然多い。ドイツは高名な音楽家を大勢輩出しているし、文人や哲学者さらに物づくりに貢献した人など多士済々である。ところが何故か画家や彫刻家はフランス、イタリアなどに比べ極端に少ない。クラナッハは人物を細身に描く独特の表現なので知っていたが他の画家は思い浮かばなかった。

中にはナチスのような触れたくない、思い出すだにおぞましい人間達もいるが浅薄な知識ではあるがドイツの歴史に残る人物像を辿ってみた。

リューベックはドイツの北部にある美しい古都で、中世の頃のハンザ同盟（14世紀航海や貿易保護を目的とした都市同盟）の盟主である。堂々たるホルステン門をくぐると古色蒼然たる美しい市庁舎が目飛び込む。近くには現在は銀行になっている大きな家があるが、ここは魔の山やブッデンブローク家の人々などを著したトーマス・マンの生家である。富裕な家柄だなどと立派なたたずまいの家を見上げた。すると不意に木曾の大庄屋の家に生まれた島崎藤村や東北の裕福な家庭で育った太宰治が思い浮かんだ。そして物語を創作するには生活に煩うことなく、没頭できる環境が必要なのかなあとふと思ったりした。しかしトーマス・マンが成人に達する前に生家の勢いは陰り没落していく、この経緯をしたためたのが“ブッデンブローク家の人々”であるとガイドから聞き、してみると貧富には関係ないのかなあなどと、つまらぬ問答が頭の中を駆け巡った。



リューベックのホルステン門



古都にふさわしい市庁舎



トーマス・マンの生家

大都市フランクフルトには、ドイツを代表する文豪ゲーテの家がある。生家は戦争で破壊されてしまったが復元され、疎開してあった家具も元通り据えてあり往時をしのぶことができる。

ゲーテは1749年に生まれ、若きヴェルテルの悩みやファウストなどの他、詩や紀行文など生涯にわたり多くを執筆している。ゲーテと並び称される文豪フリードリッヒ・シーラとは親交があり



ゲーテハウス

互いに尊敬しあい高めあった。シーラとかわした手紙は1000通にも及んでいる。ゲーテは1832年に没するが、墓はシーラの隣へと遺言を残した。日本でも年末に歌われる第九“歓喜の歌”はベートーベンがシーラの詩を好み歌詞にしたものである。

1806年ゲーテは彼の有名なナポレオン・ボナパルトとも対面している。ナポレオンは若きヴェルテルの悩みの愛読者で出会いにはいたく感動したようだ。

ゲーテは小説のみならず詩、劇作などの他地質学や生物学にも造詣が深く多才であった。また音楽家とも深いつながりがあり、特にシューベルトは生涯600曲もの歌曲のうち、野ばらや魔王などゲーテの作品を題材にしたものが70曲に及んでいる。その他シューマン、ベートーベン、モーツァルト、メンデルゾーン、マーラ、ブラームス、リストなど多くの音楽家が彼の書いた作品をもとに作曲している。ゲーテは83歳で、ワイマールで没したが臨終の言葉は「もっと光を」だった。

フランクフルトにはユダヤ人の富豪ロスチャイルド家(=独語でロートシルト)のマイアー・アムシェル・ロートシルトが1760年に銀行業を興し地歩を固めた。国際的な金融ネットワークを構築し19世紀には世界一の財産家となった。事業の活動領域は金融のみならず多角的な経営を行い現在に至っている。またNHKの地球物理学の放映で知った大陸漂流説を唱えた気象学者アルフレード・ヴェーゲナー(1880年~1930年)もフランクフルト出身である。



ノイシュヴァンシュタイン城

夢にまで見ていつか来てみたかったノイシュヴァンシュタイン城へやってきた。山の頂に白雪姫が住んでいそうな美しい城が目飛びこみ下から見上げると長良川から見る齋藤道三の岐阜城を連想させた。城を作ったバイエルン王ルートヴィッヒ二世(1845年~1886年)は神話の世界に浸り、ワグナーに心酔し、ワグナーの歌劇をイメージしながら城内装飾をアレンジしたのだそうだ。城は古城ではなく、比較的新しい近代建築で19世紀末に築城された。城内は金色だったり純白であったり、非常に豪華でカラフルで壁面も天井も絵画で埋め尽くされ、また洞窟を模したり小舟を浮かべたり城の中を歩いていると夢の世界か、お伽の世界をさ迷っているよう

な妙な感じがする。国の財政を傾けての築城、自己陶醉に陥ったルートヴィッヒ二世であるが、ある日散歩に出て同行した医師と共に水死体となって発見され、その謎めいた死をもって41歳の生涯を閉じた。

オットー・フォン・ビスマルク(1815年~1898年)は、ドイツ東部のユンカー(=地主貴族)の一人息子として誕生し、ドイツ帝国の繁栄と国際的な地位の確立に卓越した力量を発揮し、さらに小国に分れていたドイツを統一することに心血を注ぎ、人々から鉄血丞相と称された。

国外に向けては巧みな外交政策を展開し、19世紀末にはヨーロッパは戦乱が途絶え、人々はこれ

をビスマルク体制と評価した。国内政策では世界初の国民皆保険制度の実施、社会主義者鎮圧法の設定、保護貿易さらにカトリックを弾圧するいわゆる文化闘争など精力的な活動を続け現実主義を終生貫いた大政治家である。



ホーフブローハウス

ミュンヘンはドイツの古都であり、悪名高いナチスとのかかわりが深い。市内には一度に3千人を収容し、ナチスが旗揚げにも利用した巨大なビヤホール「ホーフブローハウス」がある。中に入るとそこは喧噪のるつぼである。老いも若きも男も女も大きなジョッキ片手に談じ合い歌いと誰をも陶酔の境地に引き込んでしまう摩訶不思議な雰囲気をかもしている。

ナチスはアドルフ・ヒットラーという怪物を生み出した組織である。ナチスについて特段に調べ研究したわけではないが、いつしか頭の中に情報が溜まり、ヒットラーの片腕で宣伝相として君臨した

ゲッペルス、砂漠のキツネとうたわれた名将ロンメルはじめさらにゲーリング、ヒムラー、ハイドリッヒ、リップントロップ、ボルマン、ヘス、ナチスの撃墜王リヒトホーフエンなどが思い浮かぶ。ナチスの活動の軌跡を辿ると身震いするほどおぞましい。理知的できちんともものを捉え、そして考えるドイツ人がなぜにと不思議なおもいがする。

ナチスが絶滅をはかったユダヤ人の救済に尽力したオスカー・シンドラーは、自身の経営する工場に、強制収容所に入れられ死を待つだけのユダヤ人1200人を雇い入れ、ナチスの虐殺から救った。ユダヤ人救済では“日本のシンドラー”として国外で高く評価されている杉原千畝がいる。



アンネフランクの隠れ家

ナチスの犠牲となったアンネフランクは、フランクフルトで生まれ迫害から逃れるためオランダへ逃避するも、ナチスの手が伸びアムステルダムに隠れ住んだ家が発見されて強制収容所送りとなり、15歳の若さで命を絶たれた。彼女が書き残した「アンネの日記」は戦後出版され各国で翻訳され2500万部の大ベストセラーとなった。

一世を風靡した大女優マレーネ・デートリッヒもドイツ生まれであるが自由の国アメリカへ渡った。彼女のファンだったヒットラーはドイツへ戻るように頼んだが彼女はそれを拒否し故国ドイツには戻らなかった。

日本はおぞましいヒットラー率いるナチスドイツと独裁者ムッソリーニが率いるイタリアと3国同盟を結んだ。政府も国民も正常な良識が働かなかったのだろう。人間の理性など頼りなくもろいものだ。理性変じて狂気となり、そして時には恐ろしい結果をもたらす。

ツァイスこの名前は近視の人以外はあまり知らない、ドイツへ出張が決まった時に真っ先に頭に浮かんだのは、ドイツでツァイスの眼鏡を購入したいという願望であった。日本でもニコンのレンズは優れていたが、レンズ磨きの卓越した技術者であったツァイス（1816年～1888年）が創業したツァイスのメガネは、世界最高水準との評価が高くどうしても手に入れたかった。

相対性理論を発見したアインシュタインは、バーデンで1874年3月14日に誕生した。

ミュンヘンに住みその後イタリアを経てスイスのチューリッヒ工科大学を卒業する。1901年スイス国籍を取得。1922年日本を訪問し43日間滞在するが、この間大正天皇に拝謁している。ナチ

ス政権の台頭で、1935年にアメリカの国籍を取得する。ナチスは彼を国家反逆者と名指しした。アインシュタインは1921年ノーベル賞を受賞し20世紀の偉大な人物として世界の人々の記憶に残る。バーデンで生誕した人物として天文学者でケプラーの法則で名高いヨハン・ケプラー（1572年～1630年11月15日）もいる。

また“シルクロード”の名付け親であり大探検家のスウェーデン人のヘディンの師であるフェルディナント・フォン・リヒトホーフエン（1833～1903年）は、ドイツを代表する地理学者でベルリン大学教授を務めた。

ドイツのマイン地方では活版技術の発明で知られるグーテンベルグが（1398年～1468年2月3日）生誕した。それまでは本の印刷技術は手書きによる書き写しか木版印刷であった。

グーテンベルグの印刷技術は人類の進歩に大いなる貢献をなした。羅針盤、火薬の発明に加え活版印刷の発明は3大発明といわれている。次いでながらドイツに関する数多の文献を見ているうちに、ロンドンの名高い通信社ロイター社はユダヤ系ドイツ人のポール・ジュリアス・ロイターがイギリスで興した通信社であることが判った。

ベルリンには博物学・地理学さらに探検家として著名なアレクサンダー・フォン・フンボルト（1768年9月14日～1859年5月6日）が貴族の次男として生誕している。近代地理学の名著といわれる「コスモス」、イタリアベスビオス火山研究、フンボルト海流、フンボルトペンギンなどにみられるとおり、多くの事柄に大きな足跡を残している。フンボルトはヨーロッパではフランスの英雄ナポレオンに次いで著名だとされている。フンボルトは89歳で生涯を閉じ多くの功績により国葬をもって送られた。

ザクセン地方には宗教改革者のマルチン・ルター（1483年11月10日～1546年2月18日）が誕生している。ルターは神学者で司祭、牧師であり宗教改革の中心的な人物であった。彼はまた反ユダヤ主義者でもあり、1543年”ユダヤと彼らのウソについて“を發表し7つの提案を行っている。それはユダヤ教の書物を没収、高利貸業の禁止、ユダヤ人に斧やつるはしを与え肉体労働をさせよなどと過激な提案である。ナチス政権はこれを反ユダヤの宣伝に大いに利用した。

1901年、栄えあるノーベル賞第1回表彰式にはX線の発見者であるレントゲン（1845年～1923年）が選ばれ物理学賞を受賞している。彼は織物商の裕福な家庭の一人息子で、チュリッヒ工科大学で学び物理学への関心を高めた。レントゲンの発見は、特に医学分野での貢献度が高い。医学分野にも傑出した人物がいるコッホである。ロベルト・コッホ（1843年～1910年）は炭疽菌・結核菌・コレラ菌を発見した。

コッホはフランス人のパスツールと共に微生物の自然発生説を覆し近代細菌学を確立し、以後の予防医学や抗菌療法が目覚ましい発展に寄与した。コッホは細菌培養法でも培養の媒体として寒天を用いペトリ皿を使う方法をとっていたがこの方法は現在にそのまま受け継がれている。

医療に生涯をささげたよく知られた人物として忘れてはならないのはかつてのドイツ帝国現在はフランス領のアルザス出身のアルベルト・シュヴァイツァーである、医療と伝道のためにアフリカのガボンの住民への医療のために人生をささげ、ノーベル平和賞を受賞している。

ドイツは物づくりに関しても優れた人物を世に送り出している。カール・ベンツやゴットリーブ・ダイムラーは、ともにガソリン自動車の発明を成し、今日の車社会の基礎を作った。またディーゼルエンジンはドイツの機械技術者ルドルフ・ディーゼルが1892年に発明した往復ピストンエン

ジンである。

世界的企業として長い歴史を有するクルップ社は、鉄鋼業に始まり兵器製造などドイツを代表する重工業企業であるが、同社はフリードリッヒ・クルップ（1787年～1826年）と長男のアルフレド・クルップによって創業された。また世界的な電機メーカーであるジーメンスは1874年ヴェルナー・フォン・ジーメンスによって創業されている。

日本にもなじみ深いシーボルト（1796年～1866年）はバイエルンに生まれ、70歳で没した。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、代々医師の家系に生まれ彼も医学の道を歩む。1820年開業するも東洋研究に関心を寄せ1822年オランダのハーグでオランダ領東インド陸軍病院の外科の少佐として採用され、日本研究を指向し認められ1823年8月に日本に到着。鎖国中の日本にドイツ人でありながらオランダ人を装い入国し、長崎出島でオランダ商館医となる。日本女性との間に娘楠本イネを授かる。日本では西洋医学（蘭学）に力を入れ多くの逸材を育てた。彼は日本の動植物に大いなる関心を持ち、出島に植物園をつくり多くの植物を栽培した。日本のお茶の種をジャワに送りジャワでお茶の栽培が始まった。オランダ商館長に随行し徳川家斉將軍に拝謁している。またシーボルトは日本のあらゆることに関心を示し集めた動植物の標本などを多くを故国に送ったが、その中に禁制の日本地図が見つかり国外追放となる。帰国し日本研究を全7巻にまとめ「日本」として発刊する。その後1854年日本が鎖国を解き、開国したことにより1859年再来日し幕府の外交顧問となる。ミュヘンで70歳の生涯をとじた。

音楽と言えば演歌一筋、クラシックには縁遠い素人だが、文献を漁っているうちにドイツは高名な音楽家を大勢輩出していることを知った。

バロック音楽のゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル（1685年～1759年）は作品メシアが名高い。マタイ受難曲など宗教音楽を数多く残したヨハン・セバスチャン・バッハ（1685年～1750年）。1000曲も作曲したというフランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732年～1809年）。

楽聖といわれ古典音楽の集大成をなし、大晦日に歌われる第九歓喜の歌でおなじみのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン（1770年～1827年）はあまりに名高い。



ウィーンにあるモーツアルト像



モーツアルトが使用した楽器

生涯600曲余の作品をものにしたヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト（1756年～1791年）を知らない人はいない。先年訪れたプラハの地で、オペラ“ドン・ジョバンニ”の初演をした。プラハ市内にあるモーツアルト博物館を訪れ、ドン・ジョバンニを作曲した時に使用したハープシコートや

直筆の楽譜に見入りながら、モーツアルトの熱狂的なファンであった東大某教授とミラノのスカラ座へ一緒した時に、モーツアルトの髪の毛がどこかに展示してあるはずなので探して欲しいと頼ま

れ、汗を流しながら探し回ったことを懐かしく思い出した。



ウィーンにある  
トーマス・マンの  
生家シューベルト像

19世紀に入ると、フランツ・ペーター・シューベルト（1797年～1828年）、ヤーコブ・ルートヴィヒ・フェリクス・メンデルゾーン（1809年～1847年）、ロベルト・アレクサンダー・シューマン（1810年～1856年）、さらにヨハネス・ブラームス（1833年～1897年）等が相次いで名をあげた。

中学生の時に名曲鑑賞でブラームスのハンガリー舞曲を聴いた。以来心地よい響きが頭から離れず、後年訪れたブタペストでジプシーの楽団にリクエストして第3番と5番を奏でてもらい、いたく感動したものである。

ヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー（1813年～1883年）は音楽のみならず文筆家としても評価が高い。歌劇王ワーグナーと聞くと頭をよぎるのは熱烈なワーグナーファンであったバイエルン国王ルートヴィヒ二世である。

音楽に疎い頭にも名前だけでもこれだけ思い浮かんでくる。ドイツはなぜこんなに多くの偉大な音楽家を生み出したのだろうか、常々不思議に思っているのだが。

思想界でも傑出した人物を輩出している。18世紀後半から19世紀前半にかけてヨーロッパの思想界を覗くとこれまたドイツの優れた思想家、哲学者が相次いで現れている。

イマヌエル・カント（1724年～1804年）は観念論哲学の基礎を作った。思い起こせば社会人になったばかりの頃、職場の先輩からカントの「純粋理性批判」の本を渡され、よく読んでその感想を聞かせろといわれ目を通して見たが難しく、先輩に勉強が足りないといわれた苦い思い出がある。

ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（1770年～1831年）は弁証法哲学を唱えるも、アルトゥール・ショーペンハウエル（1788年～1860年）はヘーゲルの体系に反対した。カール・マルクス（1818年～1883年）は、ヘーゲルの弁証法をもとに歴史発展の理論として唯物史観を唱えた。ワーグナー夫妻とも親交があったフリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（1844年～1900年）は独自の哲学を打ち立てた。

モスクワを訪れた時、市内にマルクスの大きな胸像が建っていた。うかつにもマルクスはロシア人とばかり思い込んでいたのだが、帰国してマルクスの経歴を調べている時ドイツ人であることを知って一人赤面したものである。マルクスは労働者階級の政権獲得と社会主義を説いた。

マルクスとフリードリヒ・エンゲルス（1820年～1895年）は、パリで親交を深め、1848年「共産党宣言」を起草し二人によって国際共産主義の原理を発表している。エンゲルスはマルクス労働運動の理論武装の礎をなし、マルクスと共に社会主義社会実現の方法を明らかにした。

マルクスはベルリン大学で学び、哲学から経済学の研究に入り資本論を著し、マルクス経済学が生まれた。大政治家ビスマルクはその主張に従い社会政策を行ったといわれている。

マルクスは哲学に加え革命思想、古典経済学を基礎として階級闘争の理論を打ち立て社会主義社会の実現方法の基盤をかたちをつくった。著作は経済学批判、資本論など多数著している。

詩人や文筆家に目を転じてもすごい顔ぶれが並んでいる。文豪ゲーテを始めとして、若者を取りこにした詩人で、パリで客死したクリスティアン・ヨハン・ハインリヒ・ハイネ（1797年～18

56年)は、ユダヤ系ドイツ人で、25歳の時カール・マルクスと親交があった。ロマンティックな詩人と小難しい学者の取り合わせは意外だが、ハイネはマルクスに影響を与えたといわれている。また多くの作曲家がハイネの詩に曲を付けているが“ローレライ”などは今でも世界の人々に愛され歌い継がれている。

ヘルマン・ヘッセ(1877年~1962年)は小説家で車輪の下などの作品を著し1946年にノーベル文学賞を受賞している。

カール・ヘルマン・プッセ(1872年~1918年)もよく知られた詩人で、上田敏訳「山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う・・・」は誰もが一度は口ずさんだ詩ではないだろうか。

子供の頃に親しんだ童話の世界で忘れてならないグリム童話は、ヤーコブ・ルードヴィッヒ・カール・グリム(1785年~1863年)とヴィルヘルム・グリム(1786年~1859年)のグリム兄弟の作品である。

文学のみならず音楽や画家、法律など多彩な分野で活躍したエルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマン(1776年~1822年)も見落とせない人物である。

余談アメリカが打ち上げたアポロ11号は、月着陸船イーグル号に乗ったアームストロングとオルドリンの二人が1969年7月20日20:17に月面に降り立った。この様子はTVで世界に向け生中継され日本では82%の高視聴率であった。当日は朝から仕事も手につかずテレビにかじりつき手に汗し画面にくぎ付けとなった。人生で最も興奮した一瞬であった。かぐや姫の住むという月に人間が降り立つなど到底信じられなかったものである。その基礎を作ったのがロケット開発の父と称されたブラウン博士であった。ドイツ帝国(現ポーランド)の貴族の家に生まれたヴェルナー・フォン・ブラウンはロケット技術に関する第一人者である。ベルリン大学を出てロケットの研究に打ち込みナチスの新兵器V2ロケットを完成させイギリスはじめ連合国側を恐れさせた。戦後アメリカへ渡り、米ソの宇宙開発競争の中でアメリカ側の中心人物として、人類初の月面着陸を実現させたその功績は絶大なものがある。